スポーツ特待生の進路形成

―― 高校球児の事例を通して ――

栗　山　靖　弘

1．はじめに

1－1．課題設定

本論文では，高校野球部員へのインタビュー調査を通じて，彼らが行っている進路形成について検討する。中でも，荒川（2009）の「ASUC 職業」および片瀬（2005）の「著名人アスピレーション」という概念に着想を得て，野球強豪校の部員が目標とする「職業スポーツ従事者」を考察の対象とする。

近代社会は，世襲や地縁による社会移動が排され，業績原理が支配的になる社会であるとされる。いわゆるメリトクラシー社会についての議論である。日本においてメリトクラシーが議論される場合，その多くが学歴や受験に関するものが中心である。近年では「大衆化」をキーワードに，学力試験によらない選抜形態の台頭が指摘されている（中村2011など）が，「受験学力」によって生徒をその後の社会的地位へ配分するという基本的な構造は依然として失われていないといえるだろう。

ところが，野球に代表されるように，受験学力ではなく特定の競技能力や実績が評価されて高校や大学に進学する者が存在することを，我々は経験的にも理解している。「○○は野球で大学にいくらしい」という話を耳にすることがあるが，このような進学の形態がそれにあたる。中村(1997)が算出したデータによると，「高校時代のスポーツや運動部の活動を基準ないし条件の一つ」にした選抜は，入学難易度の低い大学ほど多く実施されているものの，一部の難関大学においても実施されている（中村1997：81)。

一般的に，教育を通じた選抜は学力を基準にして行われるが，それとは異なる基準（経路）によって進学が可能になるシステムが整備されているのである。これは，学力を基準とする選抜原理と，特定の運動競技内の選抜原理（実力あるものが選手としての資格や地位を与えられる）とが学校という機関で同時に機能しているという事実に起因する。生徒を学力に応じて選抜・配分する機能と，部活動としてスポーツ選手を育成する機能を担ってきた日本の学校制度の特徴の一端がここに表れている。

教育や労働に関する社会学や経済学的な研究においても，日本の学校が様々な

役割を担ってきたことが明らかにされている。その代表的な例は職業安定所（職安）としての機能である（例えば苅谷1991，苅谷他編2000，菅山2010など）。職安的な機能を内包することで，日本の学校（特に中等教育）は一括して労働力を供給してきた。

本稿で対象とする部活動（運動部）にも同様の特徴が認められる。日本において，学齢期の児童・生徒がスポーツ活動に打ち込むためには，学校のクラブ活動や部活動へ参加するのが一般的である。しかし，世界的にみると，学校で部活動として行われるスポーツ活動は各国に共通したものではない。例えば欧州諸国では，国民にスポーツを提供するのは地域や民間のスポーツクラブが中心である。Heinemann and Schubert（1999）によれば，「地域内にある施設や機器を必要とするスポーツの種目をある程度の定期性を持って練習しよう」とした場合には，「一定のインストラクションやコーチング，指導が必要」になるため，人々のクラブへの加入が高まるという。そして「トップレベルを目指す選手の場合，あるいはチームスポーツの場合」にクラブの必要性が高まると論じている（Heinemann and Schubert 1999＝2010：104）。彼らの指摘からは，どの年齢段階においてクラブの加入率や加入の必要性が高まるのかについては明らかではない。だが，日本においてトップレベルの選手を目指す際には，部活動においてトレーニングを積む必要があると考えられるため，若年層（この場合，小学生から大学生までを指す）のスポーツ活動への参加は欧州とは異なったシステムに支えられているとみるべきであろう。つまり，日本とは異なり，教育（選抜・配分）機関とスポーツ選手の育成機関が分化しているのである。

1－2．先行研究の検討

こうした状況を踏まえて，高校運動部に関する先行研究が何を明らかにしてきたのかみてみよう。スポーツ特待生（制度）や部活動とキャリア形成に関する研究は，十分な蓄積があるとは言えないのが現状である。スポーツ特待生に関して論じている研究においては，その制度的問題点の指摘（森川2008）や，高校野球に関する記号論的考察（石坂2008）などに留まっている。そうした中で，直接，スポーツ特待生について考察したものではないが，部活動と進路形成を論じたいくつかの研究を参照してみたい。

はじめに，清水（1998）は徳島県立池田高校におけるフィールドワークから高校野球の状況を論じるなかで以下のように述べている。

> 池田に行ったら甲子園に行けると思う子どもに対し，親が過剰に子どもたちに接する現状は『卒業したら大学へ……』という親の期待があるからにちがいない。確固として存在するこの国の野球界のヒエラルキー・システムの流れに乗ることができれば，野球の技術と業績という『身体資本』で一流の大学や企業に進める。（略）こうしたシステムの存在ゆえに，『青春』や『若者

らしさ』といった『神話』に対抗する現実が次々に生まれてくるのである。（清水　1998：107－108）

ところが，部員が実際にどのような進路を希望しているのかは明らかにされておらず，実際のキャリア形成についての記述は見られない。清水の研究は，高校野球の「物語」が生成される過程を追ったものである。そのため，実態としての進路形成よりも，「青春」や「若者らしさ」といった高校野球をめぐる言説に主眼が置かれている。もちろん，そうした研究の重要性を認めつつも，「物語」世界の中で日々活動する高校球児がいる限りにおいて，その当事者たちが描いている，将来像に対するアプローチも必要であろう。その意味で，本論文は清水の研究を，実態に即して記述する部分を備えている。

甲斐（2000）はラグビー強豪校を対象として，高校3年生が大学受験期の直前まで部活動に参加しながら大学に進学していく様態をエスノグラフィックに描き出した。甲斐が対象としたのは大学合格実績に定評のある進学校であり，結果的に部員の多くが推薦入試で合格しているという事実が提示された。しかし，部員の進路形成を記述する中で，欠落した視点があるように思われる。それは，彼らが将来のキャリアにおいてラグビーをどのように位置付けようとしているのかという点である。部活動に打ち込む部員たちは，放課後や休日の大半を練習や試合に費やしている。そうした毎日の活動が，自分自身の価値観に影響しているのではないだろうか。そうであるならば，部活動を通じて得られた経験が，キャリア形成にも影響していると考えられる。本稿の関心に照らして言えば，「野球で進学する」ことと「野球を仕事にする」ことの他に，「野球に関わる仕事をする」という視点を織り込む必要がある。誰もが一流の選手として大成するわけではない以上，残った多くの者は，他の職業に就かなければならない。しかし，何らかの形で野球に関わっていきたいという希望が彼らの中に生まれるのは自然なことであるし，そうした希望をもつことができるがゆえに，大半の者のアスピレーションを冷却させることが可能になっていると考えられる。

上記2つの先行研究は，スポーツ研究の側面から導かれた運動部員と進路の関係についての知見である。一方で，高校生の就職状況という観点から運動部の特徴を指摘しているものとして安田（2003）の研究が挙げられる。安田は，高校生が芸術産業分野（音楽や絵画）とスポーツ分野への就職を目指す場合に直面する構造的な違いについて言及している。芸術産業分野に関しては厳しい評価を下しながらも，他方で，スポーツ分野への就職については，現状の学校教育内部の評価システムによって，スポーツ選手を目指すフリーターはほとんど出現しない状況にあるという。まず，芸術産業分野への就職志望については「例外的な専門教育を施す高校を除き，現状の日本の高校教育では，芸術家をプロフェッショナルな職業人に養成することはできない」とし，「僅かな音大や美大などの付属高校をのぞくと，多少の才能や好奇心を高校生がもったとしても，それをプロの芸術

家へと育て上げる制度も力量もない」と指摘する。「元々市場が狭い，この領域では（芸術分野に関する：引用者）就職・採用情報がビジネスとして成立しない」のである。

スポーツ分野に関しては，「普通の公立高校においてさえ，高校卒業時点までに，限られた種類の運動競技については，プロとなりうる力があるのか否か判別される機会がある」という。「評価軸と評価システムが機能」していることで，「高校や大学在学中の段階でプロ選手になれる可能性の有無や将来性を，若者自身が納得できる」仕組みが整っている。「才能の特殊性と市場の限定性というハードルは芸術産業と同じく高い」にも関わらず，スポーツ選手を志すフリーターはほとんど現れないのには，こうした理由があるからだという。

しかしながら，職業としてのスポーツ選手になることを断念した彼／彼女らが，フリーターにならない代わりに，どのような職業を希望していくのかについては言及されていない。全体的な職業人口の構造からみれば，スポーツ選手を志す者は少数であると予測されるが，彼／彼女らがスポーツ選手から他の職業に希望を変更する理由や，変更したことに「納得」できる理由を明らかにする必要があるのではないだろうか。なぜなら，先に述べたように，日本の学校は，選抜・配分機能とスポーツ選手の育成機能の両方を有しているため，選手として育成した生徒については，進路指導上の問題として学校にも責務が生じ得るからである。

こうした視点から，本稿では野球強豪校に所属する部員が，野球という競技に与えている意味づけや，職業的な野球選手になれなかった場合に希望する職業との関連について考察する。

2．分析視角と使用する用語

2－1．「ASUC 職業」と「著名人アスピレーション」について

冒頭で述べたように，本論文では荒川と片瀬がそれぞれ提唱した「ASUC 職業」と「著名人アスピレーション」にヒントを得て，「職業としての野球選手」という観点から高校野球部員の進路形成にアプローチを行う。具体的な分析の前に「ASUC 職業」と「著名人アスピレーション」の概要に触れておきたい。

まず，「ASUC 職業」とは「魅力（Attractive）」があり「希少（Scare）」であって，「学歴不問（Un Credentialized）」の職業を指している。各々の頭文字をとって「ASUC 職業」と呼ばれている。「ASUC 職業」を考える際に重要なのは「いざその職業に就けず，他の職業に就こうとしたとき，何の学歴も資格もなく，職を得るのが難しくなってしまうという恐ろしさが潜んでいる」点にある（荒川 2009：83）。

「著名人アスピレーション」は，「専門職という威信が高く，自己実現ができる職業に就くために，非制度的手段を用い」ることである。その特徴として，①出身階層の高い者が多く，②学業成績の自己評価の低い者が目立ち，そして，③

強いアスピレーション強度に比べて，達成可能性の自己評価が低い者が約半数を占めるという3点が挙げられている。ここから片瀬は，マートンの「アノミー状況」を援用しながら，彼らが「文化的に承認された目標（父親と同じような高い地位＝ホワイトカラー上層に到達する）」がありながら，「それを達成する制度的手段（学業成績）をもっていないために，非制度的手段（高い学歴を必要としない著名人になる）によって，その目標を達成しようとしているのではないだろうか」と述べる（片瀬　2005：174－177）。

「ASUC職業」と「著名人アスピレーション」に共通するのは，「学歴不問の専門職」を職業として志望する高校生が存在する点と，達成が非常に困難な職業であるという点である。「ASUC職業」と「著名人アスピレーション」と呼ばれるものには「グラフィックデザイナー」，「ミュージシャン」，「トリマー」，「小説家」，「プロ野球選手」，「プロサッカー選手」などが含まれている[1]。いずれも学歴が問われることのない専門職である。

2－2．「職業スポーツ従事者」

本稿で中心的に扱うスポーツ選手は「職業スポーツ従事者」[2]と呼ばれるが，この「職業スポーツ従事者」に関しては「ASUC職業」や「著名人アスピレーション」とは異なる特徴を有している。要件的には学歴不問の職業であり，かつ，就くのが非常に困難であるという点で共通しているが，実際には「職業スポーツ従事者」を目指す多くの者が大学に進学したのちに職業的な野球選手になるという経路を辿る。荒川によれば，「高い学歴が要件になっている職業であれば，その職業に就けなかった場合でも，他の職業に変更して就くことが容易」だが，「ASUC職業」は学歴不問である場合が多いため，他の職業への進路変更が困難になる。しかし，大学進学後に職業的な野球選手を目指す者は，たとえその目標に到達できなかったとしても大卒の学歴を使って他の職に就くことができる。

では，なぜ「職業スポーツ従事者」を目指す者は大学進学を希望するのだろうか。そこには，先に述べたように，日本において教育的な選抜・配分とスポーツ活動（部活動）が学校という同一の場で行われていることに主要な原因を求めることができる。すなわち，高校卒業段階で「職業スポーツ従事者」という目標が達成できなかったときでも，次の大学というステージでセカンド・チャンスを狙うことができる。大学でも到達が不可能だった場合であっても，大卒の学歴は手に入れることが可能なため，そこから他の職業に切り替えることが可能になる。「職業スポーツ従事者」とは，「代替的キャリアを形成可能なASUC職業」であるといえる。

本稿では，高校野球部員が「職業スポーツ従事者」を目指す上でどのようなキャリア観や将来像をもっているのかを記述することで，部活動を通じたキャリア形成の一端について論じていく。

2－3．運動部とスポーツ特待生

また，「職業スポーツ従事者」を輩出するためのシステムのひとつとして「スポーツ特待生制度」が挙げられる。この制度によって高校に進学した「スポーツ特待生」（以下，特待生）と呼ばれる部員の語りを中心に考察を進める。彼らの中には，大学進学に際しても学力試験を伴わない選抜方法で入学している者もいる。つまり，入試学力や評定平均（調査書等）によらず，野球の技術や競技実績を評価されることによって進学先が決定される場合が多い。中村（2010）によれば，1980年代が高校野球の変動期であり「公立校中心から私立校中心へと大きく変化を遂げた」時期である。その主な変化は以下の2点である。第1に，全国大会出場校数である。1981年に私立校が初めて公立校を上回り，一度は公立校が巻き返すものの，1988年以降は現在まで私立の出場校が多い。第2に，プロ野球選手の出身高校である。1987年に私立高校出身者が公立校を上回った後は，こちらもその後，私立校出身者が公立校出身者を上回っている[中村2010：203－205]。

「スポーツ特待生制度」が整備されていること，そして，将来的に職業としての野球選手を輩出する可能性が高いことから，私立の野球強豪校を今回の事例として選定した。

3．調査対象と使用するデータの概要

3－1．調査対象の概要

調査対象とする高校（以下Ａ高校と呼ぶ）は，東日本圏内[3]に位置する男女共学の私立高校で1880年代に創設された。在校生は約3000名を超える大規模校で，進学系（普通科に相当），語学系，情報系の3つの学科があり，野球部員の大半は大学進学系の学科に所属している。Ａ高校の平均偏差値は46.8であり，学科の最高は67，最低は40である。野球部員の多くが所属する大学進学系の偏差値は46なので，学校内では平均（中間）的な学科に所属している[4]。

Ａ高校は，野球部に限らず他の運動部でも地区（都道県）大会上位入賞や全国大会出場を果たしており，スポーツの盛んな高校である。その中でも，野球部は全国的にも有名で，近年も全国（甲子園）大会出場を果たしている。部員数は1学年から3学年まで合わせて67名で，そのうち28名[5]が特待生として入学している。Ａ高校のスポーツ特待生制度は，実際にはＡ～Ｃまでランクが付けられており，ランクに応じて待遇も異なる[6]。しかし，野球部の特待生に関しては，全員がＡランクで入学することができ，入学金・施設拡充費の免除，毎月35,000（授業料相当額）の給付が受けられる。

なお，部員の多くは卒業後，大学に進学している。ちなみに，部員の進学に関する過去3年間分の資料によれば，Ａ高校野球部から大学に進学した部員は71名中49名で，全体の約7割が大学に進学している。そのうち，体育・スポーツ系の大学や学部に進学した者は10名であり，大学進学者のうち約2割である。残りの

多くは人文・社会科学系の大学や学部に進学している[7]。

3－2．使用するデータの概要

A高校野球部において，2010年10月から2011年9月まで行った参与観察とインタビュー調査によって得られたデータを使用する。インタビューは練習や練習試合の合間を使って野球部監督室で行い，聞き取りには，平均で50分～90分の時間を要した。インタビュー対象者の属性は表1に示す通りである。全部で15名の部員にインタビューを行い，そのうちの10名が特待生である。本稿では，この10名の特待生の発言を中心的な分析対象とする。(表1の7列目「特待」の表記に○がついているメンバー)。本文では，この10名のうち，C.U，M.O，S.O，I.N，A.T，F.Kの6人のインタビューデータを使用する[8]。

データは，①ICレコーダーへの音声の録音，②フィールドノーツへの書き込み，③A高校の「平成23年度　入学試験要項」等の資料，④野球部長のH先生から提供していただいた野球部に関する資料の4つの方法で収集した。

インタビューは半構造化インタビュー法を採用し，部員が進学先としてA高校を選択した理由や，将来の希望進路等の基本的な内容を共通の質問項目として設定した。

表1　インタビュー対象者の属性

名前	入学年度	学年(年)※1	野球を始めた学年(年)※2	野球継続期間(年)	中学校時代の所属※3	特待	特待生として誘われた数	希望進路※4	希望の職業
C.U	2010	2	4	7	硬式	○	複数	**大学**	プロ野球選手
R.E	2010	2	2	9	硬式	○	2校以上	**大学**	未定
G.R	2010	2	2	9	硬式		0	**大学**	未定
W.Y	2010	2	2	9	硬式		0	**就職**	ホテルマン
M.T	2010	2	1	10	硬式		0	**就職**	消防士・警察官
M.O	2009	3	4	9	硬式	○	5校	**大学**	社会人野球選手
W.N	2009	3	1	12	硬式	○	1校	**就職**	JT等
R.W	2009	3	3	10	軟式	○	1校	**大学**	トレーナー等
H.J	2009	3	3	10	硬式		0	**大学**	教師
S.O	2009	3	3	10	硬式	○	0	**大学**	社会人野球または公務員
I.N	2009	3	2	11	硬式	○	1校	**大学**	教師
O.T	2009	3	1	12	硬式		0	**大学**	教師（野球指導者）
S.U	2009	3	1	12	軟式	○	不明	**大学**	未定(野球に携わる仕事)
A.T	2008	大学1	4	8	硬式	○	4校	**大学**	社会人野球選手
F.K	2008	大学1	3	9	硬式＋軟式	○	複数	**大学**	プロ野球選手

※1　表示学年は11年12月現在。
※2　表示学年は全て小学校の学年。
※3　硬式野球チームにはボーイズ，シニア，ボニーが含まれる。中学校の部活動として行われるのは軟式野球である。
※4　太字で示した部分は既に決定した進路を指す。

4．データの分析――高校球児の大学進学・受験・職業に対する意味づけ

それでは，特待生は将来的に選手として野球を続けることや，大学進学，そして受験に対してどのような意味づけを行っているのであろうか。

4－1．大学進学と希望する職業との関連

まず，彼らが大学に進学することと，将来，就きたいと希望する職業との関係をどのように考えているのかみてみよう。

将来は社会人野球の選手になりたいというある部員は，高校を選ぶ時点で，大学進学も視野に入れていたことを以下のように語る。

> とりあえず甲子園を狙えて，自分は高校の先も野球をやりたいんで，大学っていうのが自分の中でけっこう大きく考えてて，大学野球っていうのを。で，声かけてもらった中で，〔都道県〕内だったら，大学野球で一番行けそうなのが，大学に行けそうなのが，A高校だと思ったんで。（3年生M．O）
> （〔　〕内は筆者による文脈上の補足，（　）内は用語の説明を意味する。以下同じ。）

A高校入学の時点で，すでに大学に進学して野球を継続することを決めており，最終的に社会人野球を目指すのに有利な環境を求めていたことがわかる。

M．Oは特待生（学費免除）として大学に進学することが決定しているのだが，様々な選択肢を挙げながら，進学先の大学を選んだ理由を以下のように語っている。

> I（筆者，以下同じ）：なんでここ〔の大学〕にしようと思ったの？
> M：えっと，まあ，まず，いっこはあの，そこだけが全特待（全額免除の特待生）で採ってくれるって言ってくれて，で，まあ監督からも「そういうのはなかなかないぞ」って言われて〔決めました〕。（中略）教員免許（保健体育科）が取れるっていうのと，（中略）4年間しっかり野球をやれるとこに行けば，その先が見えるかなと思ったんで，ちゃんと野球やれるところを選びました。

> M：あんま学校の先生にはなりたくないんですけど，まあでも，安定してるじゃないですか。だから，教員免許取って，ダメだったら学校の先生に〔なろうと思います〕…まあ野球を教えるのもいいかなって思ってたんですけど，なんか先生っていうのはピンとこないけど，とりあえず免許取っておけば後々楽だぞみたいなっていうのがあったんで。

「全特待で採ってくれる」ことを第一の理由としながらも，「ダメだったら学校の先生に」という発言に端的にあらわれているように，とりあえず教員免許を取得することで選択肢を広げようとしている様子が窺える。だが，あくまで教員免許は「とりあえず」取っておくものという位置づけしか与えられていないことから，選択肢の中でもそれほど上位にはないことが分かる。社会人野球の選手になることが狭き門であることを自覚しているのか否かは定かでないが「安定してる」ことを理由に挙げるということは，教員免許を「とりあえず」取得することで，進路選択における「失敗」のリスクを軽減させようとしているとも解釈できる。

また，「4年間しっかり野球をやれるとこに行けば，その先が見えるかなと思った」というように，野球に打ち込むことで将来的な展望も開けると考えている。高校時代の実績で大学が決定したからなのか，大学を出た先でも同様の展開が起こると思わせるような発言である。M．Oの発言にみられるように，彼らのもつ将来的な展望は，総じて楽観的とも言えるものが多く含まれていた。これも「ASUC職業」や「著名人アスピレーション」に含まれている職業とは違い，スポーツ選手という職業が大卒の学歴を利用して他の職業に就くことができる位置にあることを示していると言えるだろう。彼の他にも，「公務員になりたい」という部員は，「公務員はこのご時世，一番安定するって思う」（S．O）ことを理由にしている部員もいる。現在大学1年生で「野球やる以上はプロ野球選手になってみたい」というF．Kは，過去にプロ野球選手を多く輩出している野球の名門大学に進学し，野球部で活動している。ところが，実際には一般の就職も視野に入れており，その際には地元（関東圏内）での就職を考えているという。プロ野球選手を目指すことへの不安などが明確に語られているわけではないが，「〔将来のことは〕さすがに考えますね，この年になると」というように，プロ野球選手に代替する職業を考えている様子が見られた（大学1年生F．K）。

ここまでの議論を整理すると，彼らのもつ大学進学と職業への関連性は，楽観的に将来について考える側面と，安定した生活を求める態度によって構成されているようにみえる。ところが，彼らの職業への意味付けを支えるものは別にある。彼らは，楽観的に安定を求める一方で，自己実現としてスポーツ関連産業に就くことを希望しているのである。事項でそのことを確認しよう。

4－1－2．代替的なキャリアの構想とスポーツ関連産業へのこだわり

先のM．Oは，教員以外にスポーツメーカーへの就職にも魅力を感じており，こちらも選手としての活動に代わるキャリアとして視野に入れている。

> M：あ，あと自分，ミズノに勤めたいと思ってたんすよ。スポーツ用品メーカー。社会人〔野球選手〕になれなかったらそれっすね，自分。

M：ミズノ好きなんすよ。スポーツ用品はミズノしか使ったことないっす。（中略）なんか自分たちの道具とか見てくれるミズノの人とかめっちゃいい人なんですよ。なんかそういうの見てて，なんか高校生と，大人になっても，高校球児と触れ合えるのがいいなと思ったり。身近にすごいやつと会えるじゃないですか。

スポーツメーカーへの就職は，スポーツに関わりのある職業とは言え，野球選手のように学歴不問というわけにはいかない。多くの大学生が就職活動の末に就いていく業界のひとつであるが，ここで「職業スポーツ従事者」と「ASUC 職業」や「著名人アスピレーション」に含まれる多くの職業との差異である，代替的なキャリアの形成が可能になることを示唆している。

現在２年生のＣ．Ｕも，プロ野球選手になることと大学進学を以下のように結び付けている。

できればプロ野球とかそこまで目指したいんで，（中略）まずはこの後大学行って，大学でも無理だったら，できたら社会人で野球をやりたいなと思っていて。

自分のお父さんは，なんか，〇〇市体育館（中略）につとめていて，なんか，インストラクターとかスポーツ系の仕事をやっているんで，そういうところに，最低そういうところ（職業）に就ければいいかなと。（２年生Ｃ．Ｕ）

目標はあくまでプロ野球選手に置きながら，その一方で「最低そういう（父親のような）」職業に就くことができればよいという認識を持っている。これも，明らかに代替的なキャリアを構想しながら，同時にプロ野球選手を目指すという進路形成である。そして，Ｃ．Ｕの場合も，職種は異なるが，先のＭ．Ｏと同様に野球選手に代替する職業としてスポーツに関連する職業をあげている。これは，Ｃ．ＵとＭ．Ｏに限らず他の部員にも見られる傾向である。プロ野球選手になることを希望しているＡ．Ｔ（現在大学１年生）も，大学で学んだ知識を活かしてスポーツに関わる職業に就くことを考えている。

Ｉ：〔他の〕仕事としてやってみたいことは？
Ａ：大学で，スポーツマネジメントとかを学ぶんで，経営学部で。だから，スポーツに関することなんで，今，興味あるのは，その，スポーツマネジメントとかで，どういう流れでスポーツが成り立ってるのかとか，スポーツを支えてる人がいるじゃないですか？そういう，そっちの人たちはどういう仕事をして，スポーツ選手をうまく成り立たせてるのかっていうのに興味あるんで。（大学１年生Ａ．Ｔ）

彼は，M．OやC．Uとは異なり，マネジメントという角度からスポーツに関わることを希望している。もちろん，高校3年生の時点での発言であるため，大学で学ぶ内容の全体を把握しているわけではないだろうが，大学で得た知識を活用してスポーツ産業に携わることを希望していることがわかる。

以上のように，特待生として高校に入学した野球部員たちは，将来的に野球選手を職業にすることを上位の目標としながらも，その一方で，目標が達成しなかった場合の，いわば保険として代替的なキャリア形成を行おうとしている様子がうかがえる。この意味において「職業スポーツ従事者」は「代替的なキャリアを形成可能なASUC職業」の代表であるといえる。

しかも，今回取り上げた部員の内，M．O・C．U・A．Tの3人は，職業としての野球選手を目標としながらも，野球（スポーツ）に関連のある職業を代替的な目標も持ちながら高校生活を過ごしている／いた。部活動に打ち込む中で，将来的に少しでも野球やスポーツに携わることのできる仕事も視野に入れながら，自らのキャリアを形成していこうとする姿を確認できる。

他にも就くことのできる職業はいくらでも存在するはずなのだが，彼らは野球やスポーツに関連する職業に就くことに対して，ある種のこだわりをもっているようにみえる。単に「野球が好きだから継続する」という程度のものではなく，自らの生活全般に野球を浸透させながら，将来的にも職業的達成としてそのスタンスを保っているようである。

では，そのようなこだわりや心性はどのように生じるのだろうか。M．Oは，スポーツメーカーへの就職の志望を語る際に「なんか高校生と，大人になっても，高校球児と触れ合えるのがいいなと思ったり。身近にすごいやつと会える」[9]ことを理由として挙げていた。そこに典型的に表れているように，彼らは職業としての野球選手と，代替的に希望する職業との距離を主観的に測りながら将来の自分の姿を描いているのである。できるだけ野球との距離が，主観的にであったとしても，近い職業に就こうとすることで，自己のアイデンティティを保とうとしているかのような態度である。つまり，彼らにとっての代替的に達成されるキャリアとは，単に「職業スポーツ従事者」に代わる職業というよりも，野球（およびスポーツ）を基軸とした生き方を追い求めようとする過程において形成されるキャリアの形態であり，スポーツを通じた自己実現の様式であると解釈できる。

4－2．受験に対する意味づけ

次に，彼らの受験に対する考えをみてみよう。高校に特待生として入学し，大学にも一般受験ではなくスポーツに関連した推薦入試で入学することについて，3年生のI．N（将来は教員志望）が不安をのぞかせながら語っている。

> 中3の時も，受験，受験って言われても，塾は行ってたんですけど，勉強のしかたとかそんなよく分かんないんで，まあ適当にこなしておけばいいのか

なみたいな感じで。いつもテストも真ん中くらいで，高校入る時も「そんなにひどくなければ入れる」みたいなことを言われて，「じゃあ大丈夫かな」っていうのを自分の中で感じてて，で，簡単に，簡単にというか，勉強もしないでこっち（A高校）来て，で，合格しちゃったんで，そういう試験っていうのって，自分の中であんまり。「簡単なんだな」って感じで思っちゃってるんで，そんなに上のレベル，上，上って目指しちゃったら，そこで挫折しちゃうのかなって自分で思います。

〔一般〕受験ていうのが，高校も〔特待で〕取ってもらって，受験っていうものをあんま味わってないんで，そういう受験，上〔のレベルの大学入試〕で勝ち残れるっていう自信がないんで，やっぱり，野球とか，そういうことととかを〔受験の中に〕入れてやっていきたいなって思ってます。（3年生Ｉ．N）

一般受験を経験したことがないことについて，不安な面を見せながらも，「まあ適当にこなしておけばいいのかなみたいな感じ」で受験を捉えており，大学受験でも，野球を受験の要素に取り入れる姿勢を見せている。

実は，Ｉ．Nは2011年の夏の大会（最後の甲子園予選）でベンチ入りを果たせなかった選手の一人である。このとき重要なのは，試合に出ていない選手であっても，大学に進学が可能なことである。まずは，彼が進学する大学と将来に対する構想をどのように考えているのか聞いてみよう。

〔進学する大学の野球部は〕そんなにめちゃくちゃ強いってわけではないんで，そこなら，〔教員免許を〕取りながらも〔野球が〕できるかなって自分で思ったので。教員免許は（卒業）単位に入らないって言われたんですよ。なんで，強い所じゃ，教員免許取りながら，社会科取りたいんで，〔野球は〕できないかなと思ったんで。（Ｉ．N）

たとえベンチ入りできなかったとしても，野球でトップレベルの実力のある大学でなければ，野球の技術を用いて進学が可能であることを示している事例である。言い換えれば，大学受験における偏差値と同様に，野球部のレベルによっても序列化されており，個人のスキルや実績によって入学が可能になることを物語っている。正確な情報は検討の余地があるが，これは，「受験難易度が低くなるほど，そして私立大学ほど（スポーツ選抜を：引用者）制度として取り入れることが多い」という，冒頭で紹介した中村（1997）の議論と符合する。つまり，比較的高いレベル（入学難易度としても，野球部のレベルとしても）の大学には一部の限られた者しか入学できないが，条件（Ｉ．Nの場合は教員免許が取得可能であることなど）が合えば，大学への進学が可能になるということだ。

高校野球部員たちは，偏差値と野球のレベルという２つの基準の間で，資格や就職を視野に入れながら，受験ついて考えているのである。

４－２－２．野球技術の関数としての「努力」と「時間」

前項では，大学でトップレベルのチームで野球を継続することが困難であったとしても，個人のスキルや実績に応じて進学する大学のレベルが序列化されている可能性が示唆された。これは，高校時代に身に付けた技術に大きく左右されることを意味している。もちろん，本人の「才能」も大きく関わっていることは疑いないのだが，それと同等かそれ以上に，野球に対する努力（多くの場合，野球に費やす時間）がより重要な指標となる。Ａ高校野球部の練習は厳しく，合宿所生活を送っている部員も多いため，時間的にも長い。部長や部員によれば，合宿所での平日は以下のような流れであるという。まず，６時に集合して体操。６時30分から朝食を摂り，７時から８時まで練習する。そこから16時までは学校に行き，16時から19時まで全体での練習が行われる。合宿所生は19時に揃って食事をするため，全体での練習はここで終わる。夕食が終わった者から，自主練習のためグラウンドやトレーニング室に向かい，各自練習する。概ね21時頃に終了し，21時30分に点呼とミーティングか行われる。消灯が22時30分なので，それまでに入浴等を済ませる。翌朝，基本的にはこれと同じ生活が繰り返される。合宿所に入っておらず，自宅から通学する部員も，自宅に帰ってから自主練習をしている。「その日によっちゃうんですけど，早く〔学校や練習が〕終わった日にはなるべく，500（回）近くは〔素振りを〕やりますね」（Ｍ．Ｔ）というように，各自で練習を行っていることがわかる。学校に行っている間を除けば，まさに野球を中心としたライフサイクルである。

しかし，「〔６時の集合の〕前にも後にも，自分で練習っていうか，素振りとかやってる人もいましたね」，「５時半とかに起きて」（Ｓ．Ｏ）というように，残りの僅かな時間を使って練習時間にあてる者もいたという。「〔誰かが早く起きて練習を始めるのを〕見て，『あ，俺も素振り始めようかな』って思うやつが出てきたりして」（Ｓ．Ｏ）という雰囲気の中で野球の技術を磨くことが，大会の結果に限らず，最終的に進学に際しても評価を上げることにつながっているのである。苅谷（2001）は，努力の指標として「学校外での学習時間」を「そのとらえ方によってさまざまな意味合いをもつ，優れて社会学的な指標」と呼んだが［苅谷2001：144］，Ａ高校野球部員たちの生活にとっては「全体練習」だけでなく，「全体練習以外での練習」も重要な時間であり，努力の指標なのだ。様々な面において目標を達成するための努力であるとも言える。完全にではないにしても，「学校外での学習時間」と「全体練習以外での練習時間」を対応して考えることが可能であり，しかも，両者とも進学準備のために費やす側面があるということ自体，日本の学校の特徴である選抜・配分機能とスポーツ選手の育成機能が同時に作動する場合の特徴といえるだろう。

4－3．運動部からの大学進学における特徴

安田（2003）が論じたように，自分の実力を判別される機会とシステムに支えられながら，進路の構想を練っている彼らの姿が浮かび上がってきた。それは，芸術産業分野とは異なるスポーツ（運動部）特有の学歴の産出システムに依っている部分が大きい。すなわち，スポーツの技術や能力が評価されて大学に進学することも，音楽や絵画の才能が評価されて大学に進学することも，表面的には「大学進学」という現象に変わりはない。だが，音楽や絵画の才能によって進学する場合，それが経済学部や法学部，ましてや理学部などであるとは考えにくい。音大や美大，もしくはそれらを専門とする学部や学科に入学するというのが一般的なのではないだろうか。音楽や絵画の技術を磨く事ができる制度的な場が学校内に担保されていないからである。

ところが，スポーツで進学する場合，より重要なのは，特定の学部や専門分野ではなく，自分の力量に合った部活動でスポーツ活動が継続できる点にあると考えられる[10]。体育やスポーツ関連の学部・学科に進学しなくても，野球を継続し，並行して別のキャリア形成を行うことも可能だからだ。

ここで，3－1で紹介した部員の進学動向が重要な意味をもってくる。実際には，体育・スポーツ系の大学や学部に進学する者もいるのだが，部員の大半はそれ以外の学部・学科に進学（多くは人文・社会科学系）していた。つまり，部活動の実績によって大学進学を果たしたとしても，入学するのは体育やスポーツとは関連の薄い学部・学科なのである[11]。つまり，彼らは，野球は部活動で行いながら選手としてのスキル・アップを図り，並行して構想する別のキャリアに関しては，他の学生と同様に企業への就職や教職につく準備を行うことが可能なのである。

5．結　語

本論文では，「ASUC 職業」と「著名人アスピレーション」を用いることで，スポーツ特待生として入学した高校球児のキャリア形成について，論じてきた。

そこで明らかになったのは，まず，スポーツ選手を職業として志望する部員は，「ASUC 職業」や「著名人アスピレーション」が想定する，達成困難な職業群という特徴を回避することが可能であり，「代替的なキャリア」を構想しながら野球（スポーツ）に打ち込む事ができるということである。そして，できる限り野球に携わることができる職業＝スポーツ関連産業に就く事を望んでおり，それが彼らの自己実現の様式として捉えられていることが示唆された。

高校球児が構想する将来像を成立させ，実現可能にしているのは，本稿でも繰り返し指摘してきた，日本の学校（部活動）の特徴である，選抜・配分機能とスポーツ選手の育生機能が車の両輪のように作用しているためだと考えられる。部活動でトレーニングを積みながら，その過程で得た技術や知識，体力等が，「ス

ポーツ推薦」や「スポーツ選抜」と呼ばれる受験制度への準備＝学歴の獲得に結果として有効な手段となり得ている。この点は，甲斐（2000）の知見と近いのだが，先の，スポーツ関連産業への就職希望，すなわち，野球を軸にした進路形成＝自己実現という点を新たに示してきた。

一度しかない高校時代を野球に情熱を燃やしている／いた高校球児にとって，プロ野球選手をはじめとする，職業としての野球選手になることは，誰もが一度は抱く夢だろう。しかし，本当にその夢を実現できるのは，ほんの僅かな者であり，大半は他の目標にシフトせざるを得ない。その過程で，少しでも野球と関わり続けることを望むことで，彼らのアスピレーションと自己実現は成立しているのである。

【註】

(1) 荒川（2009）によれば「職業スポーツ従事者」の希望倍率（全国）は65.73倍であり，到達可能性のもっとも低い職業である。

(2) 「日本標準職業分類」（総務省）の一つ。「大分類　B－専門的・技術的職業従事者」の「中分類　24　その他の専門的職業従事者」に分類されている。（総務省　統計局・政策統括官（統計基準担当）・統計研修所 http : //www.stat.go.jp/index/seido/shokgyou/kou_h 21.htm）

(3) 都道県名は調査校の希望により記述を控える。

(4) 「高校受験　高校偏差値情報」X〔都道県〕高校偏差値一覧より。
http : //momotaro.boy.jp/html/KHI%20（都 道 県 名）. html（2011年 6 月17日取得）

(5) 2010年12月現在（2011年度入学者に関しては調査を実施していないため，昨年度のデータを示した）

(6) A高校の〔スポーツ特待生〕は以下のように説明されている。

「この制度は，〔A高校〕の教育方針に基づいて，学業成績・人物が優秀で，部活動の優れた能力，または特技を有する生徒を対象にします。出身中学校長の推薦を受けた生徒に，返還の義務を有しない奨学金を給付し，有能な人材を育成することを目的としています。」

ランクごとの待遇の差異は以下の通りである。

1．〔スポーツ特待生〕A
入学金（入学手続金を除く）・施設拡充費を免除・毎月35000円を 3 年間給付

2．〔スポーツ特待生〕B
毎月18100円を 3 年間給付

3．〔スポーツ特待生〕C
入学金（入学手続金を除く）・施設拡充費を入学時に免除

（A高校　平成23年度　「入学試験要項」より抜粋）

(7) このデータは，野球部長のH先生から提供していただいた。多くの興味深い変数があるのだが，部員の進路に関する数量データの検討に関しては，別稿で改めて論じることとしたい。ここでは，大半の部員が大学進学を果たしており，人文・社会科学系の学部・学科に入学している事実に留意してほしい。

(8) 特待生ではないが，A高校野球部員の日常を記述する際に，M.Tの語りも参照した。

(9) 実際に，筆者がA高校野球部を訪れた時も，地元のスポーツ用品販売店の社長さんと社員の方が頻繁に訪問していた。それ以外に，公式戦にも応援に来ており，他の部員も日常的に彼らと接触している。

(10) ただし，自然科学系の専攻に入学すると，実験等で練習への参加が制限されることがあるため，人文・社会科学系に進学する傾向があるように思われる。

(11) インタビューを行った大学1年生のA.Tも，大学でスポーツ関連分野を学ぶと言っているが，実際は経済系の学部において学ぶのであって，体育学やスポーツを専攻するわけではない。

【参考文献】

荒川葉，2009，『「夢追い」型進路形成の功罪—高校改革の社会学』東信堂

Heinemann, Klaus and Manfred Schubert, 1999＝2010，「ドイツのスポーツクラブ」川西正志訳，Klaus Heinemann (ed.), Sport Clubs in Various European Countries，川西正志・野川春男監訳『ヨーロッパ諸国のスポーツクラブ－異文化比較のためのスポーツ社会学－』市村出版

石坂友司，2008，「特待生制度問題にみる甲子園野球の神話作用に関する一考察」『関東学園大学紀要』16

甲斐健人，2000，『高校部活動の文化社会学的研究』南窓社

片瀬一男，2005，『夢の行方—高校生の教育・職業アスピレーションの変容』東北大学出版会

苅谷剛彦，1991，『学校・職業・選抜の社会学—高卒就職の日本的メカニズム』東京大学出出版会

————，2001，『階層化日本と教育危機　不平等再生産から意欲格差へ』有信堂

苅谷剛彦・菅山真次・石田浩編，2000，『学校・職安と労働市場』東京大学出版会

森川貞夫，2007，「時評　特待生問題を考えるもう一つの視点」『現代スポーツ評論』17

中村高康，1997，「大学大衆化時代における入学者選抜に関する実証的研究－選抜方法多様化の社会学的分析－」『東京大学大学院教育学研究科紀要』37

————，　2011，『大衆化とメリトクラシー－教育選抜をめぐる試験と推薦の

パラドクス』東京大学出版会
中村哲也，2010，『学生野球憲章とはなにか－自治から見る日本野球史』青弓社
清水諭，1998，『甲子園野球のアルケオロジー－スポーツの「物語」・メディア・身体文化』新評論
菅山真次，2010，『「就社」社会の誕生―ホワイトカラーからブルーカラーへ』名古屋大学出版会
安田雪，2003，『働きたいのに…高校生就職難の社会構造』勁草書房